

苗場山麓 ジオパーク

Vol.
57

振興協議会だより

〔発行日〕令和4年10月31日
〔発行〕苗場山麓ジオパーク推進室
〔お問い合わせ〕025-765-1600



第4回 苗場山麓ジオパーク研究コンクールを終えて

苗場山麓ジオパーク研究コンクールも今年度で4回目となりました。栄村・津南町内の小中学生を対象にした研究コンクールですが、各学校から昨年（第3回）の24作品、125人を上回る44作品、127人の出品がありました。児童生徒の数が年々減少する中、各学校のご協力に感謝申し上げます。

今年度の特徴として、壁面に掲示する作品が22点と多くの出品がありました。その中でも特に、栄小学校から16点もの作品を出品していただきました。紙面にて入賞作品2例をご紹介します。

はじめに【苗場山麓ジオパーク振興協議会会長賞】は、津南小学校3年・高橋ももさんの“わたしが見た「ささばみね」”です。校外学習で行った谷の展望台から笹葉峰の大崩壊の名前についている笹葉峰まで自分の足で確かめています。車でサイトを巡るのではなく、歩いてサイトを楽しむ姿に感銘を受けました。

次いで【苗場山麓ジオパーク振興協議会副会長賞】は、栄小学校5年生・7名による共同研究の“栄村温泉調査”です。昨年から継続している温泉調査で、今回は切明温泉をはじめ5つの温泉施設を調査し、子どもなりの視点で、栄村の温泉地のパンフレットをつくろうと計画しています。栄村のみならず津南町へもパンフレットが配布され、苗場山麓エリアの温泉地の活性化につながればよいと思います。紙面の都合で、他の入賞作品については、割愛させていただきます。

課題としては、なじもんで実施している体験実習の場を小学生にもっと宣伝し、体験実習を勧めることで、ジオパーク研究コンクールに対する低学年への興味関心を高め、裾野を広げたいところです。

また、小学校でジオパークを学んだ児童が中学校では、なかなか持続しない現状がみられるので、津南中学校・栄中学校の生徒あるいは担当者向けに、事前の指導の場や時間を確保するなど、中学生のジオパーク研究に対する普及・啓発を図りたいと考えています。



高橋ももさん わたしが見た「ささばみね」



栄小学校5年生7名 栄村温泉調査



大地のたからもの～苗場山麓ジオパーク特産商品ご紹介⑪～

【山麓サブレ】

有限会社 松屋 〒949-8201新潟県津南町大割野
☎025-765-2053 営業時間7:00～19:00 定休日:毎週日曜日

ジオストーリー

安山岩と呼ばれる苗場山の溶岩を薄く削って顕微鏡で見ると、灰黒色で斜長石やガラス、輝石、鉄鉱石の斑晶で構成されています。「山麓サブレ」は、この溶岩を顕微鏡で見たときの様子を表現した甘くほろ苦い焼き菓子です。



※苗場山麓ジオパーク振興協議会・商品開発部会事務局では、新規商品の申請について、随時ご相談を受け付けております。
お問い合わせ：津南町役場観光地域づくり課 電話025-765-5454



苗場山麓ジオパークの再認定審査が行われます

ジオパークは、地質遺産を保全し、教育と持続可能な活動を行うユネスコの正式プログラムです。

苗場山麓ジオパークは、新潟県津南町と長野県栄村の範囲が平成26年に日本ジオパークに認定されました。ジオパークは、その本質的な価値や活動が持続していることを確認するために4年に1度、再審査が行われます。これは、4年間の活動報告書を提出する書類審査と、審査員が現地を訪れる現地審査が行われ、その内容を審査員がまとめ、日本ジオパーク委員会において、審査が行われます。審査結果は、再認定がグリーンカード、条件付き再認定がイエローカードです。条件付き再認定は、2年後に再審査を受け、課題が改善されていないと2枚目のイエローカードとなり、認定取り消しのレッドカードとなります。

今回、2度目の再認定審査が、11月8日（火）～10日（木）の3日間、2人の現地審査員をお迎えして行われます。

当日、見かけましたら、是非とも応援、お声掛けのほどよろしくお願いいたします。

～審査員の先生方をご紹介します～



長谷川 修一（はせがわ しゅういち）先生

<プロフィール>

香川大学特任教授 四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構副機構長
ご専門は、応用地質学

<苗場山麓ジオパークへ一言>

苗場山麓ジオパークを訪れるのは全くの初めてです。豪雪地帯のジオパークとして、雪国の弱みをいかに強みに転換しているのか、またどのようにジオパークの活動を持続可能な地域づくりに活用していくのか、現地で一緒に考えることを楽しみにしています。



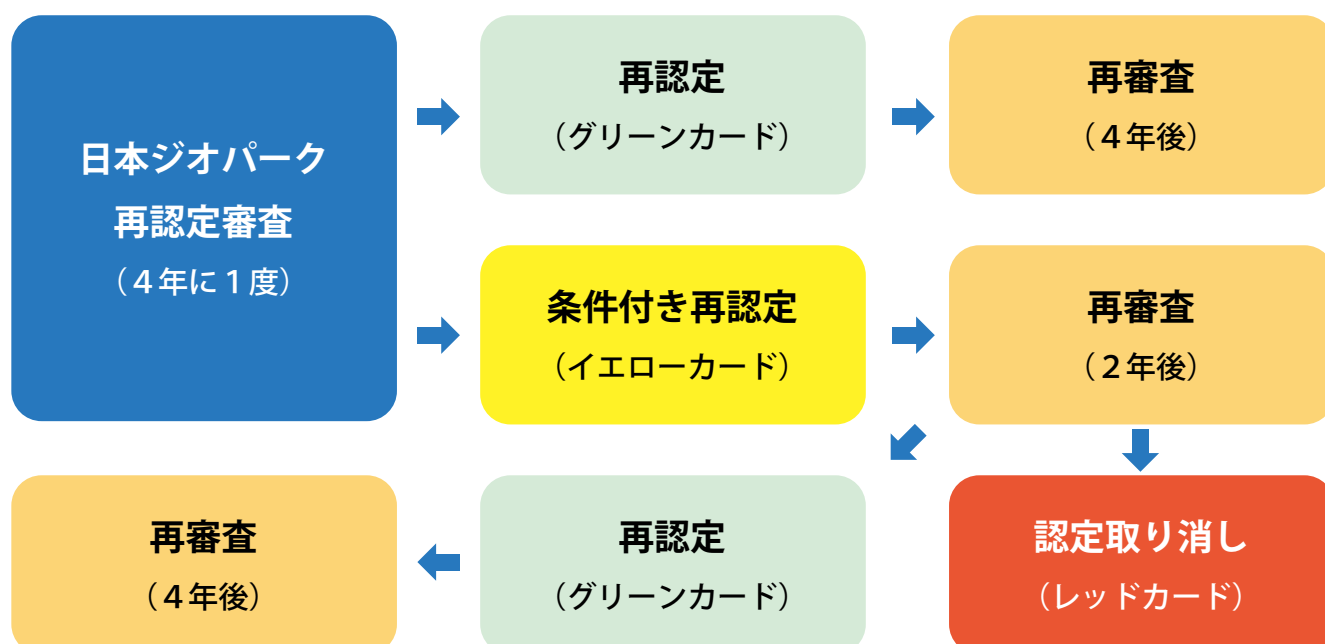
大野 希一（おおの まれかず）先生

<プロフィール>

一社）鳥海山・飛島ジオパーク推進協議会 事務局次長兼主任研究員
ご専門は、火山地質学

<苗場山麓ジオパークへ一言>

たくさんの優れた活動を推進しているジオパーク、という印象があります。現地でたくさんの人とお会いできるのを楽しみにしています。





＜再審査に向けてひた走る室長日誌6＞

苗場山麓ジオパークは、「地域資源の保全と活用」を第一義的に捉えています。その活用は、地域の住民と学童をターゲットとした郷土教育です。この郷土教育のプログラムは、副次的に「教育観光」へ素材化することのできる重要な価値の宝庫です。本ジオパークは、保全と教育に、その活動の主軸があります。しかし、再審査項目にあるように「観光としての取り組み」も大切な活動です。よって、日々私は観光の潮流にアンテナを立てつつ、自らの活動との融合を図る努力が必要だと思っています。

さて、昨今の観光議論を傾聴するならばコロナ禍が終焉を迎えても、これまでのような観光ニーズにはならず、「新しい観光」が動き出すといわれています。その新しい観光のカたちは、すでに私たちが「地域資源の保全とその価値と意味」を科学的・学術的に追い求めた成果としての「資源の人類価値」を体験と絡めながら共学する「学びの楽しさ」であり、一步踏み込めば、その「保全活動に協業する楽しさ」であります。さらに一步進めば「観光収益の一部を確実に保全整備費に充当する」という未来的思考を開花させることに繋がるものだと私は考えています。

2016年に観光庁は『持続可能な観光先進国に向けて』の報告書を刊行し、「今後の取組の方向性」を整理しました。その要点は、「適切な観光地マネジメント」を進めるために「観光指標」を定めることが提言されています。その観光指標とは、1. 観光地の運営に地域住民の意見を反映しているか。2. 地域の自然や文化的資源の保護計画が策定されているか。3. 危機管理は的確になされているかなど多岐に亘る指標が示されています。この持続可能な指標が「日本版持続可能な観光ガイドライン（Japan Sustainable Tourism Standard for Destinations：JSTS-

D）」です。このガイドラインを踏まえ、多面的な現状把握や資源のモニタリングと調査研究を背景にしたエビデンスに基づいた持続可能な観光地マネジメントを促進することが求められています。

このJSTS-Dには、観光地向けの指標であり、4つの分野と合計38の大項目・174の小項目が設定されています。4つの分野は、A. 持続可能なマネジメント、B. 社会経済のサステナビリティ、C. 文化的サステナビリティ、D. 環境のサステナビリティに分かれています。私なりに分解するならば、Dがジオ+エコに当たり、Cがカルチャー、そして、これらジオ+エコ+カルチャーを踏まえた地域経済との結び付きがBであり、その総合的な取り組みが戦略と戦術を擁する組織のマネジメント能力としてのAだと考えます。すなわち、ジオパークネットワークが、今まで議論を重ね進めてきた重要な視点であることに気が付くのは私ばかりではないと思います。

すなわち、ジオパークネットワークが地域資源をジオ+エコ+カルチャーと分解し、それらの有機的な結び付きを意識し、それらを背景に地域産業が育成してきた歴史を深く考える基本的指針が、これから進めようとする観光議論である「持続可能な観光地」にフィットするものだと思うのです。苗場山麓ジオパークは「雪のふるさと」である地域をジオ・エコ・カルチャーに分解整理し、再構築して翻訳し、地域住民や学童に伝え・共学することからはじめ、副次的に魅力的な「旅する観光地」になることを求めるものです。

私は「山と川がある」という視点に対して、景観論や風土論を絡めながら翻訳し、私たちの故郷には多雪環境を個性とする「魅力的な心象風景がある」とインタープリテーションできるための共学プログラムを進めたいと考えています。



丸木舟プロジェクト「Jomonさんがやってきた！」スタッフ・雨宮由佳さんのメッセージ

私は、今年8月に新潟県津南町にある「農と縄文の体験実習館なじよもん」を訪れた。ここを訪れたのは、縄文ムラで子どもたちと石斧で丸木舟を作るためだ。47都道府県の子どもたちと縄文時代に使われていたとされる石斧作りや丸木舟作りを通して、全ての生き物が幸せに共存する地球船作りについて学びを深めるプロジェクト「Jomonさんがやってきた！」のスタッフとして、北海道から沖縄を目指して毎週各県の主なキャンプ場でテント生活をしながら移動している。

推定樹齢250年以上の杉の樹を載せたトラックに揺られて敷地の奥に進んでいくと、目に入ってきたのは点々と建ち並ぶ美しい竪穴住居や屋根を葺く職人さん達の姿。こんなにも雰囲気がいびつたりな場所で開催出来ることに感謝し、テント張りを行っている、沢山の生き物の存在に気が付いた。栗の木、ヤブカラシに集まる蜂たち、地元の山梨では殆ど目にする機会が無くなった緑の雨蛙、様々な種のコオロギやバッタ。しかし、多様な生物が共存している豊かさに感動したのも束の間、1日もすれば出鼻を挫かれたような気持ちになった。ビニールの布一枚越しのテント暮らしは、自然と隣り合わせだが、自然や他生と調和した生き方は容易ではなく、寧ろ人間には真似ができないと思い知らされるからだ。自然の中にいながら孤立感があった。豪雨が続き気持ちが塞ぎ込みがちになる日々、隣には来る日も来る日も雨の恵みを幸せそうに受け取る生きものが目に映っていた。高温多湿な環境に、お風呂に浸かりたいと感じる時は、生身の身体一つで堂々と生きる生き物たちが側にいた。生活に必要な電気機器の自然光による天候と相談しながらの蓄電管理も虫たちは我知らずだ。極力ゴミを出さないよう心掛けたとし



雨宮 由佳さん

でも、必ず一週間に一人当たり大きなゴミ袋2袋分は出てしまう。スーパーへ買い出しに行く際も、文明のタイムマシン「車」での移動は必須。衣類を揉み洗いしている時でさえ、マイクロプラスチックが浮かんでいるであろうことに背徳感を感じながら水を流す。通信電波が安定していない時は生活に支障が出た。

今まで大きな屋根の下で営んでいた生活行為を、小さなテントで実践しようとしているのだから、大変なもの無理はない。実践を重ねる度に、自然との物理的距離は近まったのに、寧ろ自分は近代文明の恩恵なしには生きていくことの出来ない「人」なのだとはっきり理解ができた。同時に人が長く道具と共存してきた証であるのではないかと気が付いた。

人は道具を使い、暮らしを豊かにする点では生き物の中で特別な存在である。地球上の生き物たちを道具というもので幸せに導ける唯一無二の存在だ。今回、津南町での滞在で、人々の優しい心に沢山触れて、持続可能な社会に求められるのは、生活様式を先祖返りさせるのではなく、他性への尊敬と愛に溢れる精神そのものなのだという事を学んだ。人間同士の社会貢献だけではなく、地球に生きるみんなの幸せになることが社会貢献と呼ばれるような社会作りのために生きたい。



製作中の丸木舟



突撃しよう!となりのジオ便り～男鹿半島・大潟ジオパークからこんにちは～(男鹿半島・大潟ジオパーク 渡部 公成)



当ジオパークは、秋田県中央部の日本海側に突き出た男鹿半島とその東側に隣接する大潟村をエリアとして2011年に認定されました。域内は約30km四方であり、人口約2万8千人と比較的コンパクトなジオパークです。「半島と干拓が育む人と大地の物語」をメインテーマとし、恐竜がいた7,000万年前から約60年前の八郎潟干拓を含む現代までの壮大大地の歴史を連続的に観察し、その大地に育まれた歴史や文化、人々の生活なども実感することができます。

2022年で活動11年目を迎えた当ジオパークは、再認定審査を3回受けており、2019年の2回目の審査では条件付き再認定という結果でした。最も大きな課題は、管理運営体制の強化に関して、地球科学分野の専門員の配置やジオパークに精通したチームを作ることが急務であるという内容でした。今回はその際、課題解決に向けて行った取り組みと成果を紹介します。

まず、地球科学分野をはじめとした学術的知見や自然災害への防災・減災に向けたアドバイスを得るための体制強化を目指し、協議会アドバイザーの増員を図りました。秋田大学や秋田県立博物館、秋田地学教育学会の先生や日本海中部地震時に人命救助を行った防災士を迎え、2021年に4名、2022年には1名を加え、7名体制となりました。

また、協議会の構成員に大潟村博物館と男鹿水族館GAO、寒風山回転展望台、男鹿市の文化財保護審議会、大潟村の生態系公園管理事務所それぞれの代表を新たに迎えました。さらに、人事異動によりジオパーク業務経験のある職員2名を事務局へ配置することや専任職員を市村に1名ずつ配置しました。

このような管理運営体制の強化を図った結果、様々な成果がありました。その中から2021年より実施したワンコインガイドという事業を紹介します。この事業は、観光施設周辺のジオサイトの見どころを認定ジオガイドがワンコイン（500円）で案内するもので、観光客への魅力発信だけではなく、観光施設の滞在時間の増加へ寄与することを目的としました。協働で事業を進めた施設は、新規構成員の水族館と展望台です。5月～10月に月2回実施し、事前にガイド予約の無い一般観光客約80名の方を案内し、一定の成果を得ることができました。さらに、協働で事業を進めることで注目も高まり、当協議会が販売している4種類の冊子を両施設での買い取り販売や、水族館に来た教育旅行の依頼を認定ジオガイドと協働で受け入れる機会など、当初の想定に無い成果をあげることもできました。

次に、アドバイザーが増員されたことによる成果は、ガイド養成講座の講師依頼や冊子の監修、協働によるジオサイト保全活動、学術的知見が必要になった際のアドバイスを得る体制強化などがあがっています。その他、新規構成員による2021年度の全国大会の保全分科会における事例紹介や保全活動の一環とした文化財指定の推進など新たな取り組みも行い、結果として2022年1月に無事再認定となりました。

ジオパークの仕組みで重要であるネットワーク活動ですが、再認定審査の課題提示を契機に域内のネットワーク強化に尽力し、多様なステークホルダーと協働で活動してきました。結果的に活動の幅が拡大するとともに質が向上しました。今後も、持続可能な管理運営体制の構築を図るべく、域内のみならず域外のネットワークも大事にしながら活動を推進していきます。



ワンコインガイド



水族館と協働の教育旅行受け入れ